1　なぜ古代ギリシアか

「人々に力を」

すでに触れたように、民主主義（デモクラシー democracy）という言葉が生まれたのは古代ギリシアです。語源となったデモクラティア（demokratia）は、人民や民衆を意味するデーモスと、力や支配を意味するクラトスが結びついたもので、「人々の力、支配」が元々の意味でした。

かつて歌手のジョン・レノンは「Power to the People」という、文字通り、「人々に力を」と訴える曲を歌いました。街角で暮らす、ごく普通の人々が政治的に立ち上がり、自由と権利を勝ち取ることを訴えるものです。ベトナム戦争を時代背景としていますが、現在でも、その歌詞とリズムをよく耳にします。

ある意味で、民主主義という言葉のもつ素朴な含意（がんい）をもっともよく示しているのが、ジョンの歌詞かもしれません。というのも、デモクラシーという言葉は日本語に導入される際に、「民主主義」と訳されましたが（デモクラティズムでないにもかかわらず）、本来、「主

義」という言葉がイメージさせるような抽象的な概念ではなかったからです。むしろ、普通の人々が力をもち、その声が政治に反映されること、あるいはそのための具体的な制度や実践を指すものが民主主義でした（まさに民主力です）。しかしながら、本書では、日本語において定着していることもあり、民主主義という言葉を用いることにします。

おそらく多くの人にとって、もっともイメージしやすい民主主義の姿は、古代ギリシアのアテナイのプニュクスと呼ばれる丘に集まって、議論を交わす人々の様子ではないでしょうか。白亜のパルテノン神殿が見えるこの場所で、市民たちは戦争や外交を含む、ポリスの政策について代わる代わる演説し、最終的に議案を採決にかけました。これを民会といいます。もちろん拡声器などない時代です。人々は自分の肉声で話すしかありませんでした。当然、巧みに語る発言者には喝采が、そうでない発言者には野次が飛んだことでしょう。この時代に弁論術が重視されたのも無理はありません。

もちろん、現代人の目からすると、「これが民主主義か」と違和感を覚えることも少なくないはずです。例えば、この民会には女性の姿がみられませんでした。民会は特定の有力者だけではなく、ごく一般の市民が参加し、開かれた場所で議論を交わすことにポイントがあったにもかかわらず、そこから女性が排除されていたのです。民会に参加する資格があったのは、父親がアテナイ市民である成人男性に限られました。さらに、どれだけ長

甲B第1号証

くアテナイに居住していたとしても、居留外国人には市民権が与えられませんでした。また、後で触れるように、古代ギリシアのポリスには奴隷が存在しましたが、そのような人々も民会への参加が阻まれていました。

しかしながら、アテナイをはじめとする古代ギリシアの人々がデモクラティアという言葉を作り出して実践し、それが後世に大きな影響を与えたことは否定できません。私たちの民主主義もまた、この出発点と深く結びついているのです。

人類史の中の民主主義

ちなみに、このように書くと、「民主主義の起源は、本当に古代ギリシアなのか」という疑問が生じるかもしれません。人々が集まり、自分たちの共同体の方針について議論を交わしたのは、なにも古代ギリシアだけではありません。世界各地で同じような自治のための集会が開かれていたことが、現在では次々と報告されています。

一例を挙げれば、オーストラリア出身の政治学者ジョン・キーンは『デモクラシーの生と死』において、古代ギリシアに先立つ「集会デモクラシー」の歴史を探っています。彼にいわせれば、古代民主主義が始まったのはバビロニアやアッシリアです。いわば、メソポタミアという古代文明に生まれた自己統治的な文明が、フェニキアを通じて古代ギリシ

アに伝わったのです。メソポタミアの大文明からみれば、ギリシアなど、その辺境地帯に過ぎませんでした。民主主義（デモクラシー）の語源となった「デーモス（人民、民衆）」という言葉にしても、古代ギリシアにはるかに先立つ古代ミケーネ文明にその語源が見出せるといいます。同様にキーンは、近代の代表制民主主義についても、しばしば指摘される英国議会ではなく、むしろスペインの身分制議会こそが先行していると主張しています。

さらにはアメリカ合衆国の独立にあたって、ジョージ・ワシントンやトーマス・ジェファーソンら建国の父たちが、北米先住民、とくにイロコイ族における自治の伝統に着目したという研究もあります（ドナルド・グリンデ、ブルース・ジョハンセン『アメリカ建国とイロコイ民主制』）。イロコイの諸部族は連邦を形成していましたが、最終的な物事の決定は会議で行い、そこで若者から年寄りまでが平等な発言権を有したというのです。一九八八年にはアメリカ合衆国の連邦議会両院で、合衆国憲法制定にあたってのイロコイ連邦の貢献を認める共同決議案が採択されています。

このような研究については、多くの議論があり、確定的なことをいうのは困難です。それでも、民主主義の起源を無理に一つにしぼることが乱暴であるのは間違いありません。おそらく人類の歴史を振り返れば、同じような自治的な集会は世界のあちこちで開かれていたはずです。多くの場所で、人々は集まり、議論を通じて意思決定を行ったのでし

ょう。その初期においては、集会の場所は決まっていなかったかもしれません。決定に拘束力もなかったかもしれません。しかし、やがてそのような集会の場所は固定化され、開催の日時や周知・進行の手続きがルール化されていきました。そのような手続き化がかなり高度化した事例も少なくありませんでした。

古代ギリシアの独自性

このように、人間の集団が組織化していくにあたって、議論によって合意を生み出し、その合意に人々が自発的に服従することで規範を共有していく実践は、人類社会においてけっして例外的な事態ではなかったはずです。だとすればなおさら、古代ギリシアから民主主義の歴史を語り始めることに理由はあるのでしょうか。

それでも本書があえて古代ギリシアに注目する理由は、古代ギリシアにおいて、このような民主主義の営みがきわめて徹底化されたことにあります。これから詳しくみていくように、最盛期のアテナイの民主主義においては、一部の例外を除き、すべての公職が抽選で選ばれました。すべての市民は、ポリスを運営していく責任を負う可能性があったわけです。これに対し、選挙はむしろ「より優れた人々」を選ぶ仕組みとして理解され、その意味で貴族政的であるとされました。さらに民会はすべての事柄について最終的な決定の

権限をもちました。逆にいえば、民会の外部で重要な決定がなされることはありえなかったのです。また民衆裁判では、原告と被告の対等な弁論が制度化され、それを受けて陪審の人々が票決によって判決を下しました。上位の為政者や専門の裁判官ではなく、平等な市民が、規範やルールを共有していることを前提に裁判が行われたのです。

もう一つ指摘するとすれば、古代ギリシアの人々は、民主主義の制度と実践について、きわめて自覚的でした。彼らは自分たちが採用している仕組みについて誇りをもち、これを自らのアイデンティティとしました。彼らにとって市民であることとは、まず何より、民会に参加し、公職に就き、さらに裁判の陪審員となる資格を指しました。人々はこのような資格を、負担であるというよりは名誉と考えました。そのことは、例えばアテナイの指導者ペリクレスの有名な葬送演説からもうかがえます。

> われらの政体は他国の制度を追従するものではない。ひとの理想を追うのではなく、ひとをしてわが範を習わしめるものである。その名は、少数者の独占を排し多数者の公平を守ることを旨として、民主政治と呼ばれる。わが国においては、個人間に紛争が生ずれば、法律の定めによってすべての人に平等な発言が認められる（中略）。たとえ貧窮に身を起そうとも、ポリスに益をなす力をもつ人ならば、貧しさゆえに道を

とざされることはない。われらはあくまでも自由に公けにつくす道をもち、また日々互いに猜疑の眼を恐れることなく自由な生活を享受している。

（トゥーキュディデース『戦史』久保正彰訳、上巻37節、岩波文庫、二二六頁）

これはペロポネソス戦争で死んだ市民を追悼するための演説ですが、南北戦争におけるアメリカ大統領リンカーンによるゲティスバーグ演説をどこか想起させます。いずれも死んでいった兵士たちに対し、その死が無意味ではなかったこと、それは何よりも自由で民主的な国を守るものであったことを強調しています。リンカーンは間違いなくペリクレスを意識していたでしょう。それだけ、古代ギリシアにおける民主主義は、その後のモデルとなったのです。アテナイの人々にとって、民主主義は人々の名誉と誇りの源泉でした。この記憶が継承されることで、民主主義を語る一つの伝統が形成されたのです。

オリエント文明の周辺

すでに指摘したように、古代ギリシアは巨大なメソポタミア文明からみれば、その辺境に過ぎませんでした。文明の中心となったのはチグリス、ユーフラテス川の周辺でした。両大河の流域は水の豊かな場所でしたが、周囲は乾燥地帯であり、遊牧民の活動地域

でした。中国やエジプトなど他の地域と同じく、遊牧民と農耕民、そして商業民の交錯するところに、古代文明は生まれたのです。

各古代文明では、多様な都市国家が競い合うなかで統合が進み、広大な領域を支配する大帝国が生まれました。メソポタミアでも、バビロニア、アッシリア、ペルシャといった大帝国が知られています。そのような大帝国の攻防は、マケドニアのアレクサンドロス大王による遠征まで続き、最終的にはヘレニズム文明に組み込まれていきました。

ギリシアはメソポタミア文明の周辺に位置しましたが、このことはギリシアが文明の影響を受けつつも、独自の発展を遂げることを可能にしました。例えば、後ほどペルシャ戦争の話が出てきますが、ギリシアはペルシャ帝国の遠征軍を破り、その独立を保持します。文明の恩恵を享受する一方、大帝国に統合されなかったことが、その後のギリシアの歴史にとって大きな意味をもつことになりました。さらにいえば、ギリシアのあったペロポネソス半島の地形もあり、ギリシア自体、一つの国家に統一されることがありませんでした。現在ではトルコにあたるイオニア地方を含め、ギリシア的世界はポリスと呼ばれる都市国家群が並立することで構成されたのです（イオニアは、哲学の起源とされるタレスを世に送り出すなど、独自の文明を展開しました）。

このような古代ギリシアの都市国家に特徴的なことは、古代帝国にみられた巨大な官僚

制や、傭兵を中心とする職業軍人が存在しなかったことです。さらにいえば、神官たちが宗教的権威を独占することもありませんでした。古代帝国が広大な領域を統合するためには、官僚や常備軍、さらに宗教的支配を担う神官の支配を必要としましたが、古代ギリシアの都市国家にはその必要がなかったのです。これらのことが、古代ギリシアにおける独自の民主主義の発展に大きな影響を与えることになりました。

アリストテレス

ある意味で、古代ギリシアの民主主義は、官僚も職業軍人もいないところで、普通の市民たちが自ら国政を担い、決定を下し、武器を取って国のために戦ったことによって実現しました。神官の支配が存在しないこともあり、宗教的権威から自由な人々はやがて、この世界を構成する原理や本質について、自由な検討を行うようになります。古代ギリシアにおける民主主義の発展が、哲学や科学の発展と軌を一にしたのは偶然ではありません。両者はともに、人々が平等な立場で議論を交わし、自分たちで納得したことにのみ従う精神によって可能になったものです。

さらにギリシアの人々はさまざまなポリスに分立したものの、同じ文化を共有している

ということを意識していました。結果として諸ポリスの並立は、一つの実験場ともなりました。ポリスはそれぞれ独自の政体をもちましたが、それらは相互に参照され、比較されたのです。その検討の成果は後にアリストテレスの『政治学』に集大成されます。各国の政体が君主政・貴族政・民主政に区別されたことをはじめ、多様な政治の仕組みが試されたのが古代ギリシアのポリス世界の特徴でした。

ポリスの誕生

このように古代ギリシアのポリスと呼ばれた都市国家は多様でした。にもかかわらず、そこには共通の要素もみられました。中でも重要なのは、ポリスが都市とその周辺領域を含む都市国家だったことです。

この地域において、かつてミケーネ時代には小王国が分立していました。しかしながら、やがて移動と混乱の時代が続くなかで、諸王国が崩壊し、社会のあり方が大きく変わっていきます。その渦中で生まれたのがポリスと呼ばれる国家形態でした。ミケーネ時代の小王国に比べればはるかに小規模な集団であり、互いに抗争する戦士たちの自衛集団としての性格をもっていました。その指導者たちが一ヵ所に集住して都市を形成し、そこから領域を支配するようになったのがポリスです（最大規模のポリスであるアテナイにおいて、市

民は最盛期でも四万〜五万人だったとされます)。紀元前八世紀の半ばに、エーゲ海一帯にみられるようになり、その総数は一五〇〇に及びましたが、そのそれぞれが独立国家だったのです。

ポリスの中心はアクロポリスという丘でした。都市の防衛の拠点であり、ポリスという名もここから来ています。ポリスの生活の中心はアゴラと呼ばれる広場であり、この場所で人々は言葉を交わすとともに、商取引を行いました。民会も最初はここで行われていました。ポリスには城壁があり、都市の内部と周辺の田園地帯が区別されました。同時に、都市の内部においても神殿や劇場、広場といった公共の領域が、それ以外の領域と明確に区別されていました。公共の領域とはすべての市民に開かれた共通の場所であり、それぞれの家(オイコス)の領域と峻別されたのです。ここから「公」と「私」の区別が生じます。両者を明確に区別することが、ポリスの民主主義、さらには政治一般の重要な基礎となりました。

アテネの町から見上げるアクロポリスの丘。

都市の周辺領域には田園が広がり、市民は少数の奴隷を用いて農業を行いました。まさにこの田園領域こそが生産活動の場であり、そこで働く農民こそがポリス市民の中核を形成したのです。しばしば古代ギリシアでは、もっぱら奴隷が生産活動を行い、市民は労働から解放されていたとされますが、必ずしも適切な理解ではありません。重要なのはむしろ、農民として自ら生産活動も担った市民たちが、そのような活動と区別して政治などの公共的活動を捉えていたことです。「家」において市民は生産を行い、家族とその財産を維持しました。しかし、そのような私的領域と区別される公共の領域においては、市民は私的関心とは区別される、公共的な意識をもつことが期待されたのです。ある意味で、ポリスの構造こそが、そのような意識を生み出したのです。

政治とは何か

ここで「政治」とは何かを考えておきたいと思います。今日、私たちは政治については、ひどく漠然とした概念しかもっていません。これに対し、古代ギリシアにおいて

は、「政治」のイメージははるかに明確です。

すでに触れたように、ポリスの成立以前、この地域を支配したのは王たちですが、この王たちは官僚組織をもたず、貴族たちとの関係においても、相対的に優位に立つに過ぎませんでした。もともと王は戦士たちの組織の指導者であり、他の戦士から隔絶した存在ではなかったのです。しかも、この王たちはポリスの成立の過程で没落し、有力者たる貴族たちが共同して交易や防衛にあたるようになります。貴族たちは変動期の小集団のリーダーに起源をもっていますが、すでに触れたように、平民の大部分を構成する農民と同じ経済基盤に立っていました。貴族といえども、農民たちとまったく別の存在ではなかったのです。

したがって、都市に集住した貴族たちは政治・軍事・司法の主導権を握りましたが、平民もただ黙って従う存在ではありませんでした。ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』などを読んでいても、民会や裁判に一般の市民たちが集まっている様子が描かれています。彼らの声や雰囲気は、民会の決定や判決に少なからぬ影響を与えたでしょう。平民は貴族を批判し、その行動を制約することができたのです。

このようなポリスのあり方から生まれてきたのが「政治」です。「政治」には、公共の場所において、人々が言葉を交わし、多様な議論を批判的に検討した上で決定を行うという含意があります。あるいは、それこそが「政治」の定義なのです。

現在、英語などで政治をあらわす言葉はポリティクス（politics）です。この言葉はもちろん、古代ギリシアのポリスに起源をもちます。それでは、なぜ、ポリスという古代ギリシアに特有な都市国家の形式が、政治をあらわす一般的な言葉となっているのでしょうか。明らかにポリスのあり方と政治の概念の間には、深い結びつきがあるのです。

アリストテレスは『政治学』において、同じく支配といっても多様な種類があり、その区別をすることが何よりも重要であると述べています。例えば王はその臣民を支配するし、家の主人はその奴隷を支配するでしょう。しかし、ポリスにおける支配、すなわち政治的支配は、そのような支配とは違うというのです。政治的支配の特徴は、自由で独立した人々の間における「相互的な支配」にありました。

すでに触れたように、現代の私たちは、政治という言葉を、ときに安易に使う傾向があります。およそ人間が集まれば、そこに政治があるとしばしばいわれますが、このような用法にはいささか注意が必要です。少なくとも古代ギリシアの人々にしてみれば、王が臣民を上から支配することや、主人が奴隷を力で隷属させることは、「政治的」とは呼ばれなかったからです。あくまで、自由で相互に独立した人々の間における共同の自己統治こそが「政治」だったのです。

著名なギリシア史家であるモーゼス・フィンリーは、「単に民主政治だけでなく、さらに政治、つまり公の議論によって意思決定に到達し、しかる後に開かれた社会的経験の必要条件としてこれらの決定に従うという技術をも発見したのは結局、ギリシア人たちであった」（『民主主義　古代と現代』講談社学術文庫、三四頁）と指摘しています。この場合、「開かれた社会的経験」とは、すべての市民が参加できること、批判に対して開かれていることはもちろん、自分たちのことを自分たちの力で変えられることを意味するのでしょう。

あるいは、二〇世紀を代表する政治学者の一人であるバーナード・クリックも「デモクラシーと政治的支配の発明、ついで市民の間での政治的討論を通じて統治するという伝統、これらの起源は、ギリシアのポリスおよび古代ローマの共和政が持っていた思想と実践の中に求められる」と述べています（『デモクラシー』岩波書店、二三―二四頁、強調点は原文ママ）。

これらの発言を西洋中心主義として批判することも不可能ではありません。しかし、「政治」、そしてこれから検討する「民主主義」について、これを古代ギリシア人の発明として捉えることの意義も小さくありません。

第一に、政治において重要なのは、公共的な議論によって意思決定をすることです。言い換えれば実力による強制はもちろん、経済的利益による買収や、議論を欠いた妥協は政

治ではないのです。また、仮に話し合いによる決定がなされたとしても、それが閉じられた場所において、特定の人々によってのみなされたものであるとすれば、政治的な決定とはいえません。あくまで「公共的な議論」が不可欠なのです。

第二に、公共的な議論によって決定されたことについて、市民はこれに自発的に服従する必要がありました。公の場において自分たちで決定したことなのだから、その結果について、誰に強制されるのでもなく、自分で納得して従うべきであるというわけです。ここには政治において「納得」と、納得に基づく「自発的な服従」が重要であるという意味が込められています。それがあってはじめて政治の営みは、「開かれた社会的経験」の必要条件となるのです。逆にいえば、自ら決定に参加し、納得したものでなければ、いかなる決定にも従わないという古代ギリシア人の自主独立の精神がここにみられます。

このような「政治」の成立を前提にして、初めて民主主義は実現します。そこで節をあらためて、さらに古代アテナイにおける民主主義の発展をみていきましょう。

講談社現代新書　2590
民主主義とは何か
二〇二〇年一〇月二〇日第一刷発行　二〇二二年一〇月三日第二一刷発行

著　者　宇野重規　© Shigeki Uno 2020
発行者　鈴木章一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電　話　〇三―五三九五―三五二一　編集（現代新書）
〇三―五三九五―四四一五　販売
〇三―五三九五―三六一五　業務
装幀者　中島英樹
印刷所　株式会社新藤慶昌堂
製本所　株式会社国宝社
定価はカバーに表示してあります　Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。Ⓡ（日本複製権センター委託出版物）
複写を希望される場合は、日本複製権センター（電話〇三―六八〇九―一二八一）にご連絡ください。
落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、「現代新書」あてにお願いいたします。

N.D.C. 311.7　277p　18cm
ISBN978-4-06-521295-0